平成２１年度インターラボ開催報告

奥田昇（京都大学生態学研究センター）

開催日：平成 21 年 4 月 8－12 日
参加者：京都大学理学研究科生物科学専攻大学院生 52 名

生態学研究センターでは、平成 19 年度より京都大学理学研究科・霊長類研究所との 3 部局合同による「生物の多様性と進化研究のための拠点形成－ゲノムから生態系まで－」と題するグローバル COE プログラムを実施しています。3 年目の今年はちょうど中間評価の年にあたりますが、文科省から求められる成果も国際的に卓越した研究拠点の形成から国際的に活躍できる若手研究者の育成へと重きが置かれつつあるようです。素晴らしい業績を上げてもなかなか若手に就職のチャンスが回ってこないご時世ですが、世界をリードする優秀な人材を育成することは海外の就職市場を開拓するという意味で理に適った政策であるかもしれません。

さて、私どものグローバル COE プログラムでは、毎年 4 月の初旬に大学院新入生を対象として、恒例の「インターラボ」という教育カリキュラムを開催しています。その趣旨については昨年度も本誌で説明したところですが（CER ニュース、No. 101）、生物学の幅広い分野の研究に触れることによって、専門分野に囚われない独創的な若手研究者を育成することを狙いとしています。カリキュラムは 5 日間に亘って実施され、生物学のミクロからマクロ分野まで様々な研究施設を巡回しながら異分野の最先端技術を体験するというプログラムです。

当センターの施設見学は 4 月 10 日に行われ、午前中は琵琶湖調査船「はす」に体験乗船しました。今年は参加者数が多かったこともあり、3 回に分乗しないと全員が乗りきらないほどの盛況ぶりでした。この時期にしては珍しくポカポカ陽気に包まれた早春の琵琶湖、もうじき繰り広げられるプランクトンたちの賑わいを水面下に感じつつ、凪いだ湖面を割って颯爽と駆け抜ける「はす」の風を皆、満喫していたようです（写真 1）。午後は研究棟に移動し、研究紹介と主要な共同研究施設の見学を行い

写真 1　うららかな春の日差しを背に学生たちを乗せ出航する調査船「はす」

ました。

今年度から、新たに 2 名の事業推進担当者が加わり、当センターが推進する 5 つのプロジェクト研究（「陸上植物が創り出す進化生態系ネットワーク（大串隆之）」、「魚類の栄養多型の発現機構および湖沼生態系への波及効果の実験的検証（奥田昇）」、「小さな水域にできるギルド内捕食構造の季節性（椿宜高）」、「熱帯林・亜熱帯林に生息する落葉分解菌類の多様性・機能解析（大園亨司）」「表現型可塑性の分子生態学的研究（工藤洋）」）の概要が紹介されました。いずれの研究課題も、グローバル COE の趣旨に則って「ミクロとマクロをつなぐ」というメッセージを強く打ち出していたのが印象的でした。ミクロ志向の大学院生が大半を占める理学研究科にあって、私たち生態学者の抱く生物観や研究手法の違いはとても新鮮に映ったようです。もちろん、生態学を志す院生たちには、ミクロ分野の研究から多いに刺激を受け、独創性豊かな研究者に育ってもらいたいと願っています（写真 2）。

最後に、インターラボの運営にご協力いただいた、事務職員、技術職員、ポスドク研究員、RA の方々には心からお礼申し上げます。

写真 2　希望に満ち溢れた笑顔とともに湖辺で記念撮影